# 日本宋代文学学会
# 第二回大会

## ―プログラム―

■日時:　2015年 5月30日(土) 9:30開場 10:00開始
■会場:　東洋大学白山キャンパス 2号館16階「スカイホール」 (p.3～4地図参照)
■参加費:　1,000円

## 午前の部　*10:00～11:30*

司会 内山 精也

9:30　開場／受付開始
10:00　主催校あいさつ　東洋大学　坂井 多穂子
　　会長開会あいさつ　大阪大学　浅見 洋二

**(I)** 10:15～11:30 : **シンポジウム I**

### 版本時代のエディター
### ―詩人・親族・書肆―

● JSPS科研費「宋人文集の編纂と伝承に関する総合的研究」主催:第3回宋代文学研究国際シンポジウム ●

司会: 早稲田大学 内山精也

**1** 宋人詩集の生前刊行について
―士大夫と江湖詩人の異同が意味すること―　早稲田大学　内山 精也

**2** 《家世舊聞》版本補議
中国社会科学院　張　剣

**3** 從《學吟珍珠囊》到《詩學大成》、《圓機活法》
―對一種詩學啓蒙書籍源流的考察―　香港中文大学　張　健

▮ 総合討論 ▮　11:15～11:30

―昼休み(11:30～13:00)―

- **理事会**　11:45～12:00
- **評議員会**　12:00～12:30

※ 会場はともに「**スカイホール**」隣の小会議室です。昼食を摂りながらの会議となります。昼食は**各自ご用意下さい**。

## 午後の部　13:00～18:00

司会 坂井 多穂子

**(II)** 13:00～13:30 ：「艾軒学案」から見た江湖派詩人

九州大学大学院　李　祥

司会：東京大学大学院 加納留美子

**(III)** 13:30～14:00 ： 詩人としての趙次公 —その「和蘇詩」を中心にして—

筑波大学大学院　王　連旺

司会：金沢大学 原田 愛

**(IV)** 14:00～14:30 ： 宋元における『詩経』図解の形成について

近畿大学　原田　信

司会：日本学術振興会特別研究員 甲斐雄一

—休憩10分間—

**(V)** 14:40～15:10 ： 宋代古文隆盛の一因 —胡瑗『周易口義』の位置—

同志社大学　副島 一郎

司会：慶應義塾大学 種村和史

**(VI)** 15:10～15:40 ： 臨安の陸游

南山大学　西岡　淳

司会：東洋大学 坂井多穂子

—休憩10分間—

**(VII)** 15:50～17:20 ： **シンポジウムII**

主催者あいさつ　東洋大学エコ･フィロソフィ学際研究イニシアティブ代表　山田 利明

### 宋代の自然観

● 東洋大学「エコ･フィロソフィ学際研究イニシアティブ（TIEPh）」主催シンポジウム ●

司会：大阪大学　浅見 洋二

1 記の文学における自然と人為 —中唐期から北宋中期にかけて—

佐賀大学　谷口 高志

2 歐陽脩の書簡に見られる季節の挨拶をめぐって

九州大学　東　英寿

3 自然・藝術・宗教 —略論《石門文字禪》中的景畫詩禪之交融—

四川大学　周　裕鍇

▮ 総合討論 ▮　17:05～17:20

■総会　17:30～18:00

## 懇　親　会　　*18:30～*

▮会費　5,000円（本来は、8,000円のプランです）
▮会場　東京ドームホテル42階「ペガサスの間」（立食形式）詳しくはp.4の地図と説明をご覧下さい。
03-5805-2111（東京ドームホテル代表）

■大会会場（東洋大学白山キャンパス構内図）■

左の図の黄色の円が、会場の2号館（上の写真）です。2号館はキャンパス内で一番背の高い建物で、屋上にヘリポートがあります。

東京駅からお越しの場合、JR山手線内回りに乗り、「巣鴨」駅で都営地下鉄三田線に乗り換えるのが楽です。

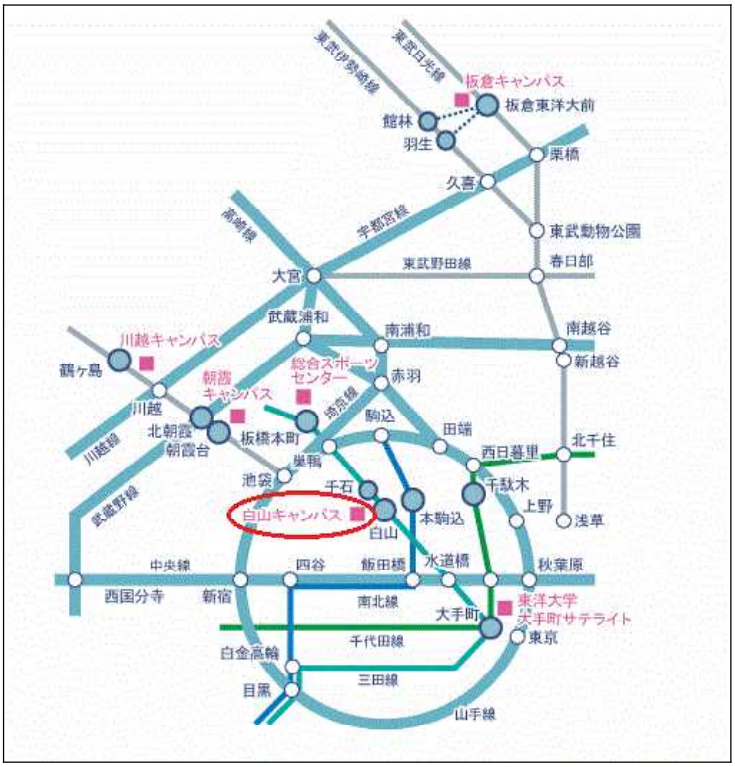
〇都営地下鉄三田線「白山」駅
・A3出口から「正門・南門」徒歩5分
・A1出口から「西門」徒歩5分
〇東京メトロ南北線「本駒込」駅
1番出口から「正門・南門」徒歩5分

☆ 昼食については、ご持参いただくか、大学内外の店舗をご利用ください。
・6号館地下1階の学生食堂（フードコート）は都内学食ランキング上位の常連です。

**◆大学周辺のランチ◆**

・「こむぎこ」：イタリアン。クリーム系パスタが美味。（「白山」駅A3出口から白山神社への道中）
・「カフェ　ボラーレ」：石釜ピザ。（「こむぎこ」の並びにある）
・「四代目　けいすけ」：つけめん。（「本駒込」駅1番出口と交番の間。本郷通り沿い）
・「UNDER　THROW　CAFE」：ベーグル等。（大学西門を出て白山通りを渡り、少し南へ。京華中・高の向い）
など、いろいろ。

■大会会場（東洋大学白山キャンパス）へのアクセス■




■東洋大学から懇親会会場（東京ドームホテル）へのアクセス■

〇都営地下鉄三田線「白山駅」から「目黒・白金高輪方面」の地下鉄に乗り、2駅目（乗車時間3分）の「水道橋」駅にて下車。A2出口から徒歩1分。
所要時間：約20分。

※東洋大学からホテルまで歩くと、（坂井の足で）30分以上かかります。

※当日は東京ドームにて「GLAY」のコンサートが開催されますが、お帰りの足には影響ありません。

# —発 表 要 旨—

〔午前の部〕

**I.** シンポジウム Ⅰ

## 版本時代のエディター

### —詩人・親族・書肆—

JSPS科研費「宋人文集の編纂と伝承に関する総合的研究」主催：第3回宋代文学研究国際シンポジウム

早稲田大学　内山 精也

宋代は、中国史上、最初の本格的な版本時代である。写本時代と比べると、書籍を形にしてゆく過程で、編集者の役割は格段にその重要性を増したといってよい。このような観点から、今回のシンポジウムでは、編者にスポットを当て、彼らがどのように如何なる目的で書籍を編み、世に送り出したのかという問題を通して、宋人文集の世界を探る。

### 1 宋人詩集の生前刊行について

——士大夫と江湖詩人の異同が意味すること——　早稲田大学　内山 精也

唐宋詩人の詩集を概観してみると、おおまかな傾向として一つの共通点が浮かび上がる。それは、詩集の編纂が後世に向けた行為である、という点である。にわかに広範囲の流伝が期待できない写本時代の唐ならば、それは合点がゆくが、版本時代に突入した宋代に入ってからも、趨勢としてはあまり大きな変化は生じていない。ところが、南宋の中興期になると、画期的な変化が生まれる。それは楊万里の自編詩集の出現である。彼は生前の折々に自撰詩集を編み、なおかつそれを上梓している。そして、南宋後期になると、陳起の書籍鋪による一連の江湖小集の刊行に見られるように、詩人の詩集が生前に刊行されることが決して珍しいことではなくなる。本発表では、唐以来の保守性がいずこより生じたのかという問題を明らかにした上で、楊万里以後の変化を少し細やかに分析し、詩人が生前に自撰詩集を刊行することの意味について問い直してみたい。

### 2 《家世舊聞》版本補議

中国社会科学院文学研究所　張　剣

《家世舊聞》是陸游所著的一部具有重要史料價値的筆記，共上下二卷，但長期以來，僅以節本或抄本形式流傳於較小的範圍內，其全貌罕為世人所知。二十世紀九十年代，孔凡禮先生以明代穴硯齋鈔本為底本，將《家世舊聞》點校整理出版，該書整體價値及版本狀況始漸為人所知。孔校本雖然精良，但也難免疏忽之處，衍生了一些穴硯齋本本來沒有的錯誤；另外，

孔校本限於條件，未能注意到臺灣地區所藏的另一《家世舊聞》足本（張珩藏本），亦是憾事。王水照先生《讀中華版〈家世舊聞〉》一文首先介紹了臺灣地區所藏的這一版本，有功學界，但是由於王先生沒有親眼看到明穴硯齋本，不免將有些孔校本的錯誤歸結到穴硯齋本身上，亦有分辨的必要。本文詳細比勘孔校本、穴硯齋本與張珩藏本的異同，并就其優劣之處及《家世舊聞》版本流傳稀少的原因略作分析。

### 3 從《學吟珍珠囊》到《詩學大成》、《圓機活法》
——對一種詩學啓蒙書籍源流的考察——

香港中文大学　張　　健

王夫之《薑齋詩話》說：「如欲作李、何、王、李門下廝養，但買得《韻府群玉》、《詩學大成》、《萬姓統宗》、《廣輿記》四書置案頭，遇題查湊，即無不足。」（卷下）這裏提到《詩學大成》與明代復古派的關係。朱琰《學詩津逮序》：「場屋功令用詩，學官弟子皆以詩為課，坊間有《詩法入門》、《圓機活法》二書，初學者樂其簡便，奉為圭臬，一時紙貴。」這裏提到《圓機活法》，與清代科舉之間的關係。《詩學大成》、《圓機活法》乃是元明流行的詩學啓蒙讀物，在奠定詩歌基礎方面具有重要地位，塾師往往以之為課本，坊肆則不斷刊刻以射利。但是，學詩者一旦入門，便對這種入門書籍棄之不顧，諱言甚至貶斥之。除著錄於目錄外，少有人專門論及，更鮮有研究，其文獻的梳理迄今闕如。本文擬對其編者、內容及版本、流傳諸問題做一初步的考察。

**〔午後の部〕**

## II.　「艾軒学案」から見た江湖派詩人

九州大学大学院　李　　祥

『宋元学案』は宋代と元代における学術の源流と伝承をまとめた著作である。『宋元学案』による学派の分類も後世の学者に認められている。本発表では、『宋元学案』に明示されている学者の授受関係を切り口として、江湖派詩人の間における学術と文学創作の関連を解明したい。今回は、特に今まで十分に注目されていない「艾軒学案」を取り上げたい。なぜならば、「艾軒学案」の案主である林光朝の三伝弟子の四人（劉克莊、劉克遜、劉翼、林希逸）はすべて江湖派詩人であり、これは『宋元学案』においては甚だ稀な現象だからである。したがって、この四人に着目して、「艾軒理学」が文学創作に与えた影響を明らかにするのと同時に、『宋元学案』に含まれている他の江湖派詩人をも考慮にいれて、南宋学術と江湖派の関係について論じ、江湖派詩人の研究の中において、今までと異なる視点を提供したい。

## Ⅲ. 詩人としての趙次公 ―その「和蘇詩」を中心に―

筑波大学大学院　王　連旺

趙次公、字は彦材、蜀の人。その文学作品は現段階の調査では、詩歌３首、文章３篇しか残っていない。趙次公の作品集は歴代の蔵書目録に記録されていないので、一体どれぐらいの詩文を創作したかについては、不明である。本発表は『四河入海』から検出した趙次公「和蘇詩」四十七首を研究対象とし、趙次公「和蘇詩」の数、性質、創作時期、流伝、といった点について略説する上で、趙次公「和蘇詩」の分類、特色及び創作動機について検討を加える。

趙次公「和蘇詩」は大別して二種類に分けられる。一種類は人物を中心とする和詩である。このような作品20首がある。もう一種類は物事を中心とする和詩である。このような作品が27首ある。更に細かく分類すると、人物を中心とする和詩は「代和類」と「和補類」に分けられる。物事を中心とする和詩は同題擬作類とまとめられる。

北宋と南宋の間は、江西詩派が盛んな時代であった。趙次公の詩も時代の特徴を持つものの、平易な表現や擬人法の使用など、蘇軾からの影響もみられる。

## Ⅳ. 宋元における『詩経』図解の形成について

近畿大学　原田　信

『詩経』が解釈され、読み継がれてきた状況を解き明かすうえで、図解は文字による注釈とともに少なからぬ価値をもつ資料だと考えられる。しかし、これまでの『詩経』研究のなかで、図解はあまり取り上げられることがなかった。

そこで発表者は、まず歴代の『詩経』図解がたどった経過を把握するため、各図解の類似性に注目し、主にその変遷過程について研究を進めてきた。この結果、発表者は南宋初期に楊甲が編纂した「毛詩正変指南図」が人気を博して各地に広まったこと、そして南宋以降、民国初期に至るまでの『詩経』図解の多くが「毛詩正変指南図」や、南宋から元代にかけて同図を改編した図解が原型となっていることを指摘した。

それでは、後世の原型となる宋元の『詩経』図解は一体どのようにして形成されたのか。この問題について、本発表ではこの時期の『詩経』図解の編纂目的と利用状況、そして「毛詩正変指南図」の編纂と改編の経過という二つの点を手がかりとして考察する。

## Ⅴ. 宋代古文隆盛の一因 ―胡瑗『周易口義』の位置―

同志社大学　副島　一郎

宋人はいつたいに易學に熱心であり、所謂古文家として名を成した人たちも決して例外ではない。と言ふよりも、王禹偁、范仲淹、穆修、歐陽脩、蘇氏父子等々、いづれも普通以上に『易』を研究した。范仲淹によつて抜擢された胡瑗は、ふつう古文家とは見做されてをらず、その太學における講義録『周易口義』を繙いてみても、まとまつた文章論のごときものは見當たらない。それでは、彼の易學はせいぜい高弟程頤に受け繼がれただけで、古文發展に寄與するところはなかつたのだらうか。『易』はそもそも中國文章論の濫觴の一であるからには、胡瑗の『易』理解は、多くの門下に陰に陽に影響を與へた筈である。本發表は、『周易口義』を古文史上に位置づけようとする試みである。

## VI. 臨安の陸游

南山大学　西岡　淳

南宋の陸游はその生涯の多くを故郷山陰に在って送り、現存する詩の凡そ三分の二以上はその山陰で作られたものである。また、自らの詩集に『劍南詩稿』と命名したことが象徴するように、入蜀の旅と蜀中での体験は彼の創作に大きく影響した。それらに比べれば、南宋の首府臨安において彼が詠じた詩は特に数が多いわけでもなく、また彼自身が都会を好んでいたとは思われないこともあって、「臨安に春雨初めて霽る」のような一部の例外を除けば、広く知られているものは比較的少ない。都城という場とそこに在るさまざまな事物に関して、彼の態度はどちらかといえばあまり好意的ではなく、故郷山陰や蜀中における作に比べれば、臨安での諸作には総じて孤独感が漂っている。だが一方から見ればそうした諸作というのは、世に対する彼の認識の仕方を陰画のようなかたちで語っているともいえる。また更に仔細に見てみると、都に在ったその時々に応じて、その認識自体も微妙に変化していったように思える。その軌跡を辿ることにより、彼の創作の在り方について一考したい。

＊＊＊

## IX. シンポジウム Ⅱ

# 宋代の自然観

東洋大学「エコ・フィロソフィ学際研究イニシアティブ（TIEPh）」主催シンポジウム

大阪大学　浅見 洋二

**人は自らを取り巻く自然によって深く規定されている。人は自然を離れては存在しえない。かくも重要な意味をもつ自然を、中国宋代の文人たちはどのように認識し、どのように表現したのか、詩・記・書簡などさまざまな作品の言葉を手がかりにして考える。**

## 1 記の文学における自然と人為

——中唐期から北宋中期にかけて——

佐賀大学　谷口　高志

ある事物・事象について記述・記録した文である「記」は、唐代、特に古文が提唱された中唐期以降に、散文の文体の一つとして盛行し、数多くの作品が書かれるようになる。その扱う内容はさまざまだが、山水自然に関係するものが大半を占めており、当時の文人たちの自然認識や、自然との接し方・関わり方をそこに窺うことができる。

たとえば「記」の作品のうち、とりわけよく見られるのは亭台について述べたものだが（韓愈「燕喜亭の記」、歐陽脩「醉翁亭の記」など）、この亭台は自然を観賞するために作られた人工の建造物であり、当時における自然と人為の関係性について多くの示唆を与えてくれる。また「記」のなかには、人工の自然ともいうべき庭園を扱ったものや（白居易「草堂の記」など）、石や花など特定の自然物の蒐集について述べたものなどがあり、これらも自然と人為の関わりについて興味深い内容を含んでいる。

本発表では、自然をめぐる諸問題のうち、特に自然を自らの手（人為）によって占有しようとする意識のあり方に焦点をあて、中唐期から北宋中期にかけての「記」の文学を概観してみたい（白居易、歐陽脩の作品を中心に取り上げる予定）。

## 2 歐陽脩の書簡に見える季節の挨拶をめぐって

九州大学　東　英寿

書簡を書く際、本題に入る前に季節の挨拶語を書き添えることは多い。宋代に編纂されたと考えられる日用百科全書『啓箚青銭』に当時の正式な書簡の書き方が掲載されているが、やはり本題に入る前に季節の挨拶を書くことが記されている。

歐陽脩の書簡においても様々な季節の挨拶が書き込まれている。彼は自身の詩文に植物や樹木を読み込むことも多く、なかでも『洛陽牡丹記』では牡丹の栽培方法を季節の移り変わりに従って記録するなど、自然の移り変わりや季節の変化を敏感に感じ取っていたようである。歐陽脩が書簡にしばしば季節の挨拶語を書き込むのは、当時の書簡の書き方に倣ったのはもちろんのこと、このように自然に関心があったことが影響しているのかも知れない。

ところが、今日に残された歐陽脩の書簡624篇を詳細に確認してみると、歐陽脩自身が編纂した『居士集』に収録された書簡には季節の挨拶語がなく、一方南宋の周必大が編纂した『居士外集』や『書簡』に収録された歐陽脩の書簡には季節の挨拶語が書かれており、大きな違いが見て取れる。本発表では、こうした歐陽脩の書簡に見られる季節の挨拶語を手がかりとして、『居士集』や『居士外集』、『書簡』の編纂過程について考察したい。

## 3 自然・藝術・宗教

——略論《石門文字禪》中的景畫詩禪之交融——

四川大学　周　裕鍇

北宋詩僧惠洪的詩文集《石門文字禪》中，風景、繪畫、詩歌與佛禪常呈現一種交融的狀態。其表現為以下幾點：一是用佛教獨特的觀照世界的眼光來看待風景，改變了風景的自然樣態，使之蘊含宗教屬性。二是將風景直接看作繪畫與詩歌作品，尤其是看作某個特定的佛禪之

境。三是試圖將身處風景中的自我當作繪畫或詩歌中的主角，成為與古德媲美的宗教形象流傳後世。惠洪看待景畫詩禪之態度，受到王安石、蘇軾、黃庭堅詩歌的啓發，但個性更為鮮明，交融之自覺性更為強烈。

—以上—